かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

蘭

初代の心にかえり信仰の喜びを
深めよう　伝えよう　広げよう
一、持ち場立場で日々理作り
一、家族揃って教会参拝
一、一日一件にをいがけ

立教172年
3月号

年頭会議における大教会長様 ごあいさつ

伸るか!! 反るか!!

昨年は、教祖130年祭に向かう2年目の年として、一人ひとりが日々の真実の理づくりをしながら、おぢばへの伏せ込みひのきしんをしようと申し合わせて、一年間通りました。

秋季大祭に合わせて別席・ひのきしん団参をするなどして、大勢おぢばに帰り、初席・中席を運んだり回廊拭きひのきしんなどをして、昨年一年間本当に滞りなくつとめられました。

改めて皆様方のお心寄せに御礼申しあげます。本当にありがとうございました。

年祭に向けての決意を熱く語られる大教会長様

昨年は、初席者・おさづけの理拝戴者が、一昨年に比べてわずかですが増加しました。

わずかずつではありますが、130年祭に向かって少しずつ成人の歩みができているのかなと感じた昨年一年間だったと思います。

わずかでも増えたということは、皆様方が本当に心一つにおつとめくださった結果ではなかろうかと思っている次第です。

年祭への思いを変えずに

いよいよ今度は3年目ですが、再来年 立教174年11月30日には大教会創立120周年記念祭をつとめること、それに向かって、年が改まってから三年千日仕切っての成人の歩みをさせていただきたいということを、昨年秋季大祭で発表しました。

年末には、スローガン・実践項目も発表し、直轄教会の春季大祭参拝を通して、直轄教会へ向けての徹底を図りました。

大教会創立の日取りが、教祖年祭に向かう歩みのちょうど真ん中だということは本当に有難いことです。10年というスタンスで考えると、どうしても間延びしてしまって、途中で何の歩みか分からなくなりかねませんが、ちょうど真ん中の時に大教会の記念の時旬を迎えるというのは、真ん中で間延びしないように、踏ん張ってするようにと、正しく、親神様が付けてくださった節目ではなかろうかと思います。

この三年千日は、飽くまで教祖130年祭に向かう「途中の山場」としての歩みであって、決して別のものではなく、同じ歩みをより早めていくような歩みでなければなりません。

先ず、その点をしっかり心に置いていただきたい。

ですから、スローガン・実践項目には、「おつとめ奉仕者の増員」ということは掲げていませんが、それを踏まえてのスローガン・実践項目だということを、心に置いてください。

当然ながら、教祖130年祭に向かって、よふぼく一人ひとりが日々に真実の理づくりをしようということも(実践項目の中の「日々の理づくり」がその延長線上だとお解りでしょうが)、これも変えずにおつとめいただきたい。

先ず、大事な角目を申しあげ、改めて、スローガンを申しあげます。

初代の心にかえり信仰の喜びを
深めよう　伝えよう　広げよう

そして、実践項目として

一、持ち場立場で日々理作り
一、家族揃って教会参拝
一、一日一件にをいがけ

「深めよう」の実践項目として「持ち場立場で日々理作り」、「伝えよう」の実践項目として「家族揃って教会参拝」、そして「広げよう」の実践項目として「一日一件にをいがけ」という内容になっています。

「一日一件」は「家々の一軒」ということではなく「1回」・「2回」という「件」ですので、お間違えになりませんように。

今日に間に合うようにポスターを作りましたので、教会・布教所に貼っていただき、先ず、教祖130年祭に向かっての思いも変えずに、それに加えて、それをより高める一つの旬として、スローガン・実践項目をしっかりと心に置いて、共々に3年間仕切ってつとめ切らしていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申しあげます。

自発的な心で

このスローガン・実践項目は、決して、命令や義務ではありません。言われたからする、仕方ないからしよう、ということではありません。

本部や大教会からのこういう打ち出しに関しては、こうしなければならない、ああしなければならないということではなく、むしろ、私たちの方からの「どうさせてもらいましょうか」という問いに対して「それなら、こうしたらどうか」ということであって、つまり、あるべきは私たちの心の中ということです。

「よし、年祭に向かって何か成人の歩みをさせていただこう」という皆様方の自発的な心に対して、それでは、こういう心で、こういう実践項目ならどうかと申している項目です。

その点、大事な順序ですので、どうぞお間違えにならないように心に置いていただきたいと思います。

このお道自体が、教祖がこの道を始めたいから付けられた道ではありません。世界一列をたすけたいという思いの上から、次々と不思議な御守護を現わし、その中から、「たすけていただいたご恩報じをさせていただきたい、それにはどうしたらよろしいか？」と自発的にご恩報じを願い出た人たちに対して、親神様の思召を伝え、元の理のお話をし、おつとめを教え、おさづけを渡し、たすけ一条の道をおつけくだされた、この道の姿がある訳です。

つまり、神様の方からの一方的な命令ではなく、むしろ、私たちの方からの問い合わせに対して、方向をお示しいただいた道の姿がある訳です。

そのことから考えてみると、この道は決して、命令でもなければ義務でもありません。

成人できるような思案を

昨年10月21日に「創立120周年記念祭をさせていただく」と発表し、それでは何をさせていただこうかと多くの方が思われたと思いますので、それに対して、決めさせていただいたものです。

今までの大教会の打ち出しに関しては、私なりにあるいは理事か、理事に主だったメンバーで、方針を決めて発表していた経緯がありますが、今回の打ち出しに関しては、むしろ、理事会はほとんど関わっていません。

実行委員会を作り、そこに10名ほどのメンバーを決めて、そのメンバーで決めていただきました。

今までなら、主だった人でやったいましたが、今回はむしろ主だった人を少なめにし、私より若い人をメンバーに入れ、老若織り交ぜて、種々練り合っていただきました。

記念祭について発表し、「さあ皆さんから、どういう気持ちでどういうふうに年祭に向かって成人の歩みを進めたいか、どうぞ思案してください」とテーマを与えて決めていただきました。

実は、すぐに決まったのですが、それを聞いた限りでは、どうも若い人の意見が入っていないようでしたし、私の思いとも多少ズレていましたので、もう一回白紙に戻してやり直していただきました。

そして、また何回も何回も練り合いを重ねていただいた結果、こうさせてもらいたいといって持って来られたのが、このスローガン・実践項目でした。

私の思いともちょうど合いましたし、「ああ、ようここまで思いを進ませてくれたなぁ、ありがとう」ということで、早速理事会に諮り、役員会に諮り、承認を得て発表にいたりました。

これはご参考までにお話ししましたが、そういう形で出てきたスローガンだということを心に置いていただいて、共々に、このスローガン・実践項目を中心として、心定めの達成に向けてしっかりと歩ませていただきたい。

折々に初心に還る

内容についてお話しますが、先ず、「初代の心に」と申しますのは、笠岡の初代であり、それぞれの教会の初代でもあり、またよふぼく・信者の家々の初代も含まれます。

笠岡の初代についても、またの機会にしっかり勉強していただきたいと思いますが、それぞれの教会、また、よふぼく・信者の家庭におかれましても、この旬に改めて次代を担う人々に、そういう話しをしっかり取り次いでいただければありがたいと思います。

信仰の喜びをしっかり伝えていないと、信仰をしていても良いことが一つもない、という気持ちにもなってしまいかねません。

また、代が重なってくると、ついつい通るのが当たり前になり、親が悲しむから「親孝行」で仕方なく自分も通るということにもなってしまいます。

「教会長」という立場をいただき、その思いを持ってつとめていても「仕方ない、それらしいことをやっておけばいい」というような形になってはいないでしょうか。本当の信仰としての教会長の姿というものを、果たしてどこまで心に持って歩んでいるでしょうか。

もちろん、皆それぞれに立場をいただいて一生懸命歩んでおられるとは思いますが、ただ、当たり前に流されて、反省もなければ成人もない、毎年、何も変わらないとするなら、これは、常に成人を目指して、持ち場・立場でしっかりと反省しなければならない、その点を真柱様は年頭のごあいさつで仰ったと思います。

今のままでよい、また、ただ後（あと）さえ続いていればよいというのではなく、もう一度、初代の思い・初代の通り方をしっかり尋ね、自分が初代になったつもりで三年千日を歩む、そういう気概を持ってつとめることが、今の旬には大切だと思います。

創立という一つの元一日を目指して歩むためにも、それぞれが本当に白紙に戻り、初代の心に立ち返って、三年千日歩まなければならないと思います。

どうぞ、このお道に繋がる一人ひとりが、もう一度初代を尋ね、そうして、そこから始めさせていただきたいと思います。

逆境から始まった信仰

教会名称としての笠岡の初代は上原さとさんですが、上原家の信仰の初代は上原佐助さん（さとさんの夫・東大教会の初代）です。

佐助さんが、行きつけの床屋の主人からお話を聞いたのが始まりで、身上から入信した訳でもなく、追い追いに本部の先生方を次々と自宅に招き、信仰を深めていました。

ところが、その後、大阪で営んでいた大商家も経営不振となり、遂には店を畳み、大阪には棲む処もない、舅・姑は笠岡に戻る、主人である佐助さんは知人を頼って東京に行く、子供は里子に出

す、というようなことで一家離散の憂き目に遭いました。

店の後仕舞いをしていたさとさんも、やがて、舅の要請で笠岡へ帰りましたが、翌日には姑が出直してしまいました。

普通の人なら、信仰をしていてなぜこんなことになるのかと文句の一つも言うところでしょうが、ところが、それこそ逆に、そこから本当の信仰が始まったのです。

程なく訪れた旧知の人の主人の身上を、御供（ごく）さんによって鮮やかなご守護をいただきました。これが口伝てに広がり、たすけを願う人が次々と訪れ、あるいは、乞われておたすけに運び、生計を立てるために始めていた小間物屋すら手が回りかねるようなことになってしまいました。

というような形で道一条になり、今日の笠岡の道ができた訳です。

自分自身の信仰の喜び・勇みは？

そうして考えてみると、初代の道の元はどこにあるのかいえば――年寄り二人のために何とかしなければと、親孝心で笠岡に帰ってきた。

また、幼い子供や舅の世話をしなければならないのに、次々とたすけを願ってくるものだから、そのたびにおたすけに出た。

それこそ親神様の求められるままに、教祖の思召になったままに、自分の一身一家の都合を捨てて、素直におたすけに掛かられた。――ここではないかと思います。

笠岡の道の礎は、「親孝心」と「素直にたすけ一条に歩む」、この2点ではなかろうかと、改めて思います。

ここでよく考えておきたいことは、一家離散というような大きな節、「こんなのやってられるか」というような中にあって、むしろ信仰の喜び・勇みになっている、ということです。

今こそやらせてもらわねば、信仰のお陰や、結構やと、むしろ勇み立ったということです。

それが笠岡の元になっているのです。

お互いに、この信仰の喜び・信仰の勇みというものをしっかりと持たなければと思います。

ご守護があるから、思う通りになるから信仰するのではなくて、どんな中にあっても、この信仰のお陰で結構だ、また人助けできて勇める自分があるという気持ちをしっかりと持たなければならないと思うのです。

そして、それを「深め」・「伝え」・「広げ」ていくのだということです。

親神様の思召を「伝え」るということではなくて、自分自身の信仰の喜び・勇みを「深め」・「伝え」・「広げ」ていくのだということしっかり心に置いていただきたい。

それを「深め」・「伝え」・「広げ」る

それを「深め」る実践項目で「持ち場立場で日々理作り」です。

今抱えている持ち場・立場での理づくりが、どうすればできるのか、どう理づくりをさせていただこうか、と自ら求めて理づくりの歩みを進めていただきたい。

当然、持ち場・立場で、理づくりの仕方は違いますから、今ここでこうしろああしろと言える問題ではありません。

教会長としての理づくりについては参考までに申すこともできますが、3年もありますので、それぞれの持ち場・立場で、教会長として、布教所長として、教会長夫人として、どういうことが理づくりになるのかしっかり思案して、それを日々、こつこつと積み重ねていただきたい。

次に「家族揃って教会参拝」。

それぞれの教会にあっては、「教会にいるのだから、あんたも信仰せなあかんで。ああせなあかん、こうせなあかん」ではなくて、自分の信仰の喜び・勇みを子どもに伝える。

よふぼく・信者の家庭なら、自分の喜び・勇みを子どもに伝えていくことが、それぞれの家でなかなか言い難いなら、教会に連れて行って話していただきましょう。

「神さんのお陰で日々こうやって結構に通らせてもらってありがたいなぁ、嬉しいなぁ、あんたも嬉しくないか？ 嬉しいやろ！ それならその嬉しさをなぁ、教会に参拝して神さんにお礼申しあげよう。そうしたら神さんまで喜こんでくださって、私たちにより喜こび勇みを与えてくれるんやからありがたいなぁ、さあ一緒に行かせてもらおう。」というような参拝をしていただきたいものです。

1年に1回、半年では申し訳ないので月に1回、週に1回、近くだから毎日、どんな形でも結構ではないですか。

どうですか、子ども共々、そして、親類縁者共々、誘い合わせて教会に参拝してみてください。ただ参拝するだけではなくて、それを通して「伝え」ていくということをさせていただきましょう。

そして3つ目、「一日一件にをいがけ」。

普通の人に、さあ今から一緒ににをいがけといっても難しいでしょうから、信仰の喜びを1日1件にをいがけ、1日1回にをいがけ。

昨年から日々の理づくりを何かさせていただきましょう、わずかなことでも構いませんから、と声を掛けております。

「分かりました。何かご恩報じさせていただきたい、理づくりさせていただい」と「今まで掃いたことないけど、今日から毎日、家の前の掃除をさせていただこう、皆さんが通られる道路を少し掃除させていただこう」といって心定めされた方も中にはおられるでしょう。

そこで、ただ掃くだけではなく、そこにちょっと一言、通られる人に、「おはようございます。今日も好い天気ですねぇ。今からお仕事ですか。頑張って行ってくださいね。」と喜びを伝えるのですから、その声を掛けることもにをいがけではないですか。

どうでしょうか。やってみませんか。

買い物に出た時に、ふと見たら、横の人が歩くのがちょっとしんどそうにしている、「大丈夫ですか？ 何かお手伝いしましょうか？」と、あるいは、信号を渡りにくそうにしている、「大丈夫ですか？ 手を引いて上げますから一緒に渡りませんか？」と声をかけるのもにをいがけでしょう。

今は、なかなか、そういう人の親切を受け入れる時代ではありませんが、受け入れられないからしなくてもいいのではなくて、少しでも喜びを人に伝えていく――有難い嬉しい、その気持ちを自分だけのものにするのではなく、一人でも多くの人に声掛けしていく――これが1日1件にをいがけです。

会社勤めしているのなら、人よりも少し早く出社して、雑巾を絞って皆さんの机の上を拭きながら、次々来る人に「おはようございます。今日も元気で頑張りましょう。」と声を掛ける。これも1日1件にをいがけになりますよ。

そのぐらいに思って、その喜びを広げる何かを1日1回ずつでもやらせてもらいましょう。歩くだけがにおいがけではないのです。

そうなったら、今度は共々ににをいがけに出させていただきましょう、おたすけに掛からせていただきましょう、そういうようなことに繋がったらいいのではないでしょうか。

決意!!

そのための三年千日だということです。

今は毎日ではなくても、今日からちょっとずつ始めて再来年には毎日になれるように頑張るなら、それでもいいではないですか。そういう形で、気持ちで、この三年千日を通り切らしていただいたなら。

そして、皆様が、それぞれ帰られてから、また、教会・布教所に繋がるよふぼく・信者の皆様一人ひとりに声を掛けていただきたい。

声を掛けるのも、大教会から言われたからではだめですよ！大教会から声を聞かせていただいて「ホンマにそうや」と思らなら「私もやらせてもらわな」というふうに思っていただきたいのです。

先ず、自分のものにしていただいたものを、「私はこういうふうにしてこうさせてもらうで、あんたはどうするんや、一緒にさせてもらわないか」と、そうして今、笠岡に繋がるよふぼく全員にその思いを広げる、同じ思いを持ってもらうと同時に、今度はまた新しくよふぼくになってもらう人にも、また同じように声を掛けたなら、３年後には、親神様・教祖に本当に大きくお喜びいただける旬を迎えさせていただけるのではないでしょうか。

そして、また、その勢いでもって、130年祭に向かったなら、おつとめ奉仕者がどれだけ増えるか、私は、今から楽しみにしております。

さぁ、やってみなければ、なるかならんか分かりませんよ。でも、「こんだけやったらどんだけご守護いただけるかなぁ」と思って楽しみを持ってやったならどうですか。やってみましょうや!!

先ずは、ここにいる皆様一人ひとりがそれぞれにしっかりとつとめていただいて、笠岡に繋がるよふぼく皆が一手一つに思いを持って、共々に成人の歩みを進めさせていただきたいと思います。どうぞ、よろしくお願い申しあげます。

ということを申しあげて、新年の挨拶とさせていただきます。

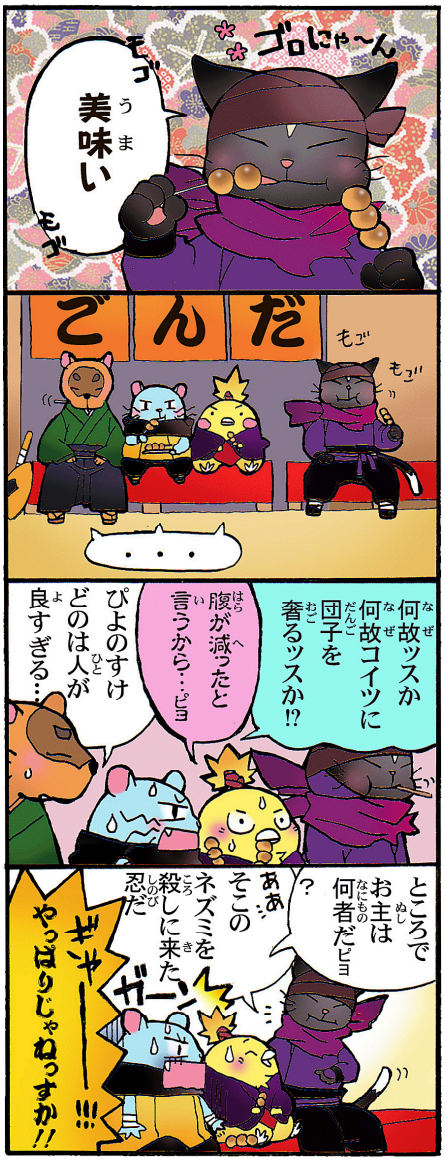
そうしたら、おつとめ奉仕者でも20人ぐらい増やさなあかんという気になってきました？

いゃぁ、うちは100人ぐらい増えそうやなあという気になってくれましたか？

《以上要約》

笠岡五人衆四小間劇場

第六回「団子屋の四匹」



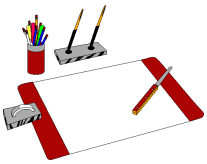
つづく

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介
③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

寒空の中、勇んで神名流し・戸別訪問

初の青年会・女子青年合同例会

勇んでは出たものの…。

ラ”～、寒っ・

去る2月22日、青年会と女子青年が合同で例会を開き、神名流しと戸別訪問を行いました。

当日は、寒空にも関わらず、青年会員12名・女子青年12名を含む、計36名が参加しました。大教会で、お願いづとめをつとめ、お話を聞いた後、近隣の城見台団地まで、神名を流しながら移動。団地では、リーフレットを片手に、2，3人の組で戸別訪問を行いました。

中には、この日が、初めてのにをいがけとなる参加者や、子どもの姿もあり、皆で手分けして、一軒一軒勇んで回りました。

帰り道も神名流しを行い、にをいがけ終了後は、青年会・女子青年とそれぞれの会で、懇親を深めました。

みんなっ！
私についておいでっ!!

やっぱ、にをいがけの後は気持ちいいわぁ～

・・・・　<(_ _)>

「おつくし」「おつとめ作法」学ぶ

教会長講習会開催　髙屋分教会

髙屋分教会では２月18、19日、１泊２日間の日程で教会長講習会を開催、同教会役員を含む25人が参加した。

これは髙屋分教会につながる教会長が一手一つに心を揃え、時旬のご用をつとめさせて頂きたいと毎年実施されているもの。今回は「おつくし」の意義「おつとめ作法勉強」について開かれた。

初日は武内正美同会長が「大教会創立120周年三年千日の歩み出しの年、教会の龍頭になる者としてどの様に日々を通らせて頂くか、特に“おつくし”に対して教会につながる人たちにどう取り次がせて頂けば良いか、講習会で学んで頂きたい」とあいさつ。

引き続き、西田憲市先生（櫻井大教会詰所主任、布教の家岡山寮前寮長）が「おつくし」について講話。自身の布教道中を振り返りながら「どんな中でも人間思案を捨て、神様を絶対と信じて通らせて頂く事が信仰の第一条件。そして、おつくしはご守護の要であり、神様への伏せ込みである。おつくしをする事によって神様のご守護をひしひしと感じ、さらに一粒万倍としてお返し下さる。おつくし一筋で日々通ったささやかな伏せ込みが、今日の結構な姿になっている」とおつくしの大切さ、すばらしさを強調された。

西田先生はおつくしの大切さを強調された

夕づとめ後、懇親会が持たれ、信仰談義で盛りあがった。

２日目は神殿掃除、朝づとめ後、北川勇、佐藤主計同教会理事から、世代交替で若い教会長が増える中、おつくしに対して教会長としてどの様な思い、心構えでつとめるか、また ○上級へのお供え、お礼 ○ご奉公 ○葬儀、年祭関係のお供え、お礼――など具体例をあげて両理事の経験を通してのアドバイスを受けた。

この後、大教会長様を講師に朝、夕のおつとめ、月次祭のおつとめ作法勉強が行われた。

まず教服の正しい着方から始まり、朝、夕のおつとめの基本動作、祭典時の祭員の作法、動作などの説明を受けた。次に役割を決めての実技に移り、地方、てをどり、鳴物の合わせ方と進められた。途中、参加者の質問に対し、その都度、細かく説明された。

てをどりは6人が合わせてつとめる事が大切

最後に「おつとめ、祭儀式作法は朝、夕のおつとめで練習出来る。特別に練習するのでなく、普段から意識して動作する事、そして、てをどりは１人でするのではなく、６人で合わせてつとめる心構えが大切」と締めくくられた。

参加者の１人は、おつくしについて「正直話しにくい。まず自分から実行し確信を持って伝えていける様努力したい」また、おつとめ作法は「毎日意識して動作する」という大教会長様の言葉が心に残ったと話していた。

おめでとうございます 三嶋秀野さん 百歳！

去る２月10日、笠尋分教会二代会長夫人・三嶋秀野さんは満100歳という誠におめでたい日を迎えられました。

当日は、長寿を祝って、岡山県知事 石井昌弘氏・岡山市長 髙谷茂男氏より、それぞれ祝状と記念品が贈られました。

また、同13日付けの地元誌・山陽新聞の「岡山市民版」にも掲載されましたので、ここに転載いたします。

なお、昨年の敬老の日（９月15日）には、（当時の）内閣総理大臣 福田康夫氏より、祝状及び記念品（銀杯）が贈られました。

中畦の三嶋さん 100歳おめでとう

県と市祝う

岡山市中畦の三嶋秀野さんが十日、百歳の誕生日を迎え、県と市から祝福を受けた。

自宅で長女の栄さん（七九）＝同所＝や親族が見守る中、三嶋さんは、県や市の担当者から名誉長寿証や記念品などを「おかげさまで」とにっこりほほ笑みながら受け取った＝**写真**。

庄村（現・倉敷市）出身の三嶋さんは結婚後、現在の自宅で夫と米麦やイグサを栽培して生計を立てた。娘一人を育て、五人の孫、十四人のひ孫、十人の玄孫（やしゃご）に恵まれた。若いころは和裁が得意で最近は毎朝、コーヒーを飲んだり新聞を読むことが楽しみという。

婦人役員、委員部長講習会開催

髙屋分教会 婦人会

婦人会髙屋委員部では２月18日、婦人役員、委員部長講習会を開催、30名が参加した。

これは同委員部が心を揃えて歩ませて頂こうと毎年実施しているもの。

まず武内正美同委員部長が「婦人会創立100周年の歩みも今年は仕上げの年で、百という重みを感じてこの一年を婦人会成人目標、活動方針のもとにそれぞれの持ち場、立場で日々理づくりにつとめ、自分の出来る事を考えて実行させて頂きましょう」と開講のあいさつ。

引き続き、委員部長としての日々の歩みについて３人の委員が感話。身上、事情を通して感じた事、またご守護を頂くまでの過程などを話した。

この後、参加者を４班に分け若い司会者を中心に ○100周年の仕上げの年の歩みについて ○活動方針についての各教会での実施内容について――などねりあった。

最後に茶話会が持たれ「まず動く事！」を誓って閉会した。

なお、同委員部では創立100周年に向けての理づくりとして今年一ヶ年、毎月18、20日のいずれか１日大教会で伏せ込みひのきしんを実施させて頂く。

二月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます
親神様の子供かわいい一条の果てしない親心のまにく天然自然のお働きと自由の御守護を賜り日々は結構に恙なくお連れ通り下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共は月毎のおつとめを通してそのお働きを体感させて頂き 喜び感謝の心を新たにしつつ 日夜御礼申し上げ日頃は御恩報じを念じて持ち場立場で理作りをしながら 世界だすけの御用の上に勤め励ませて頂いております
その中にも今日の吉日はこれの笠岡の理にお許し下さいました御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕者一同喜び心も一入に 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて二月の月次祭を執り行わせて頂きます 御前には遠近を問わず又寒さも厭わず今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて世界的な経済不安の中 日本も例外ではないどころか輸出に頼る日本こそが一番深刻であると連日報道され 大人はさることながら若い人にも一層不安を抱かせている現代 今こそ信仰の大切さ 有難さを伝えていかなければなりません 本日は祭典に引き続き学生層育成者講習会を開催させて頂き まず大人である私共がその必要性を再認識させて頂くと共に 一人でも多くの学生に声掛けさせて頂き おぢばで開催される学生生徒修養会や春の学生おぢば帰り等の緒行事に参加を促すだけでなく 一人一人の丹精や育てに力注いで行く所存でございます 又信仰の喜びは学生のみに留まらず世の人々にも広げて行けるよう一日一件にをいがけを目指してたすけ一条の御用の上に邁進させて頂く覚悟でございます
何卒親神様には親孝心一筋に成人の歩みを進める皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に自由の御守護をお現し下さり 道を歩む一人ひとりの信仰の喜びが 後に続く者に伝わり 又世の人々に広がって お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を 一同共に慎んでお願い申し上げます

こころの詩

東悠分教会前会長夫人　田林 美智子

むさし野の 面影のこす 大木に
春は名のみと 粉雪の舞う

▼表紙の絵　福満分教会前会長夫人　福島悦子さん

▼4コマ漫画　大教会　上原元子さん

大教会だより

◎第８１２期修養科

自　立教171年12月1日
至　立教172年2月27日

＊教養掛

三ヶ月間　高木昭祥（湯田原分教会長）
一ヶ月目　山成友司（稲富士分教会長）
二ヶ月目　仙田公男（天場山分教会長）
三ヶ月目　森本忠善（海松ヶ岡分教会長）

＊修了者

府中市　豊田宏哉
島根　辻井万喜子
福満　福島佑佳

◎教会長資格検定講習会修了者

前期　立教172年2月14日終講
御野　佐藤哲
新山邑　三島まさよ

◎本部食堂ひのきしん

自　立教172年2月16日
至　立教172年2月28日
瑞雲　豊田俊美

訃報

高木一夫氏

湯田原分教会前会長
二月十一日出直されました。
享年　九十七才

「はたらく」

派遣切り問題・・・もともと派遣社員なんて・・ロボットに出来ない仕事を介助する程度の立場も何もない部材に等しく、必要なくなれば放り出す、これが身上の契約条件だ！

ショッピングセンターの社員教育を頼まれた時の事、正社員とパートの格差を問われた。仕事をすると言う上では肩書きや立場の必要の無い職場なのに、パートだから責任は無いなどと全く考え違いをしているのです。自己の時間制約で短時間従事するだけ、仕事をする取組みは全ての者は同等であり、臨時や派遣といえども時間内をフルに働くのが使命であり其処に給金が支払われるのである。その仲にも、忠実に他を抜いて仕事に秀でれば、正社員の登用の事例がある。私事ですが、中途採用の身で、システムの開発をした頃、それはもう・・時間ではなく何日も家に帰らず、寝ていても「ひらめき」が起こり枕元のメモに走り書き！即実行！その時の給金は通常勤務だけ！極秘の開発は認知されがたいのです。しかし特許の栄は自分に、果てはトップに君臨。団塊の世代が支えた「高度経済成長」は定年を越しても経営陣に迎えられる人もある。

今問題の人達は公園でたむろし、食事や住まいまで他人の世話になり、努力を放棄した者が本当の弱者だろうか？天理教の教祖は「はたらく」とは「はたはたを らくにすることやで」と説かれた。自分が楽して傍に世話掛けてでは、人の為の働きなど到底出来ないのである。何時まで経っても・・・世間や肉親のお荷物でしかなく、転落人生へ・・・。

ニートとかフリーターとか云う自由を掲げる若者が、あわてて駆け込んだ派遣社員！形だけで心の無い働きに「自分に見合う仕事じゃあない」と豪語している。仕事を見習い、自分をそれに合わせて習得するのが道理の社会。マスメディアの報道だけで人の心や社会が救われる事は無いのであり、地道な努力と真の「はたらく」が、人生の成功者達がたどった道の答えであろう。我を見習えとは云わないまでも、派遣社員契約と言う、人材を商売にした落とし穴の落伍者でしかないのであろう。その人達に手を差し伸べる教会を天理時報が知らせてくれた。（に）

大教会長様

『かさおか』３月号のゲラ刷りができましたので、お目通しお願いいたします。

２月号に掲載する予定でした「年頭会議における大教会長様お言葉(要旨)」の録音を門脇さんからいただきまして、どうにか原稿がとれましたので、３月号に掲載いたしました。

最終的に３日にでも印刷しようかと思っておりますので、不備の点等ございましたら、２日の教区例会のときにお知らせいただけると幸いです。

お忙しい中とは存じますが、よろしくお願い申し上げます。

立教１７２年２月２８日

岡 﨑 真 一